

タイトル	Loss among the Lost: F. Scott Fitzgerald 作品における終わりなき喪失
著者	松浦, 和宏; MATSUURA, Kazuhiro
引用	北海学園大学学園論集(186): 37-48
発行日	2021-11-25

Loss among the Lost: F. Scott Fitzgerald 作品における終わりなき喪失

松 浦 和 宏

はじめに

F. Scott Fitzgerald の作品には、作者が抱えていたプリミティブな問題が反復して表出し、その結果喪失が繰り返し描かれる。それは彼自身が生涯に渡り背負い続けた問題意識であり、彼の作品のテーマでもあった。と同時に、作者も登場人物たちも失われたものを具体的に認識できていない。それは常に失われた“何か”であり続け、彼らの意識の中で到り得るべき射程を失い常に宙に繫留され続ける。その“何か”を視界に捕らえ、現実と架橋しようとすれば、そこでまた新たな——今度こそ本当の——喪失を招いてしまう。彼らの物語は、新たな喪失を引き起こしながら続くのである。“Three Hours Between Planes”を軸に据えながら、*The Great Gatsby*, “Babylon Revisited,” “Winter Dreams”などの作品においても喪失の主題が繰り返し反芻されていることを本論は指摘したい¹。

1. 「喪失」の重要性

Fitzgerald の作品の多くは、喪失の回復を試みる物語だと言える。*The Great Gatsby* は、Jay Gatsby が失った女性を奪還しようとする物語であり、“Winter Dreams”は Dexter Green が物語の最後に自分が“何か”を失ったと唐突に気付かされ、そしてその回復を試みる。“Babylon Revisited”では、失った一人娘を取り戻そうとする Charlie Wales の姿が描かれる。“Three Hours Between Planes”では、Donald Plant が過去に失った女性との関係を回復させようと試みている。これらの物語に描かれているように、Fitzgerald にとって喪失が重大なテーマであることは明らかだ。

Fitzgerald における喪失の問題は、時代性と紐付けられることが多い。しかしながら、作者に繰り返し喪失の主題を描かせた動機を、時代性という鍵語だけで十分に説明できるとは言い難い。作者に強い影響を与え、この主題を描かせたものとは、何だろうか。Michell Breitwieser は、

¹ Richard D. Lehan によれば、“Three Hours Between Planes”は Fitzgerald の極めて個人的な経験が物語の根底になっているという——初恋の女性、Ginevra King との久し振りの再会が Fitzgerald にインスピレーションを与えたのだ（96）。

Fitzgerald の伝記的作品である作家三部作を橋頭堡として、作家の人生から喪失の主題を見出している。

Rather than a lost thing, a thing never had, and therefore a sense of lacking without the ability to know what it is that lacked. . . If, as Freud suggests the work of mourning lies in the incremental construction in conscious memory of an adequate representation of the lost thing, a representing that delineates a re-presenter who survives, then the inheritor of mourning is doomed to an inability to mourn — a true inability, not a deep or insurmountable unwillingness. (253-54)

Fitzgerald は、彼が生まれる前に2人の姉を亡くしている。この出来事が、彼が作品中に強迫的に喪失を描き込むきっかけとなった。作品と Fitzgerald の人生を結び付けてみると、過去のイメージは死者や喪失と同義となる。死（者）は、喪失の内容や性質の不透明性を象徴している。また、Jonathan Schiff もこの私的な喪失が Fitzgerald を作家として駆動していたと指摘する。

Fitzgerald wrote about a constellation of various mourning patterns from his childhood: his parents' alternate preoccupation with grief or his two elder sisters and displacement of their grief onto him, behavior that in turn encouraged his sense of maternal and paternal loss, but also his identification with their grief. Furthermore, these circumstances contributed to his literary insights into cultural mourning norms. (13)

これらの考察は、Fitzgerald の文学的テーマを考察する上で、死者や喪失の問題を排除することが不可能であることを示唆している。幼い娘たちを亡くした母親が Fitzgerald を溺愛し、この作家は母親の影響を非常に大きく受け続けることになる。その母親が、娘たちに対する喪を常に背負っていたのだが、それを Fitzgerald も必然的に引き継ぐことになった。しかしながら、母親が亡くなった後、その喪失は対象を失い宙を彷徨うこととなる。自分の知らない存在の喪を引き継いだものの、その起点となる母親を失ってしまったからである。これが、彼に永続的な喪失を植え付けたのだった。すなわち、固定的欠損を彼は生涯背負い続けることになった。喪失は Fitzgerald の人生や文学作品を語る際に必然的に視野に入る主題と言える。Breitwieser の指摘を拠り所とすれば、作者が受けた生来的な影響が時代背景的な影響に先行しているとも言える。

その一方、当時の社会的背景が Fitzgerald に影響を与えたという指摘もある。Greg Forter は、当時のアメリカ社会が発していた“social loss”に対するメランコリックな反応が Fitzgerald に影響を与えていると主張している。

What, then, is the social loss with which *The Great Gatsby* is concerned? The simple answer is “Gatsby,” or rather, the possibilities for male identity that the novel embodies in Gatsby: receptivity, lyrical interiority, a belief in the colossal power of desire, the possibility of economic and imaginative self-making. (25-26)

しかしながら、Fitzgerald が家族の喪失から受けた影響は、時代性や当時の社会的背景という言葉では説明しきれない不可逆的なものなのではないか——作家が生まれつき背負っていた問題を、時代性は蹂躪できない。作者と癒着していた問題は、主題的な形で作中に深く彫り込まれている。

作家自身が喪失感を抱えていたように、彼の作中に描かれる人物たちも同様の問題に苛まれている。その喪失は、保有していたものを失うのではなく、もとより保有していないものであることが多い。元から手元になかったものに対して、あたかもそれを失ってしまったと感じている——それが彼の作品中で登場人物たちが抱く喪失感なのである。何を失っているのか認知していないまま、喪失や空白を感じている、とも言い換えることができる。*The Great Gatsby* では、“repeat the past” (86)、すなわち Daisy を Tom から奪還し過去を繰り返すことを目的としていると思われがちだ。しかし、Gatsby の目的は Daisy の存在それ自体ではなく、Daisy を取り戻すことを通じて過去に失った“何か”を見出すことだ。詳細は後述するが、このような喪失は先述の Breitwieser の指摘とも正確に符合している。作家自身が対象を認知できない喪を背負っていた——であるならば、作中に何度も描かれる喪失の主題も、作家のそれと共鳴しているはずだ。対象を認知できない喪失。何かを失っているとは認識しているものの、具体的には把握できていない。その欠如の全容を見出すために、Fitzgerald 作品に生きる登場人物たちは、失った何かを探し続ける。

既に述べたように、作者が抱えていた喪失感は、作品にも投影されている。登場人物たちは、自分の中から消え去ったものを信仰にも似た希望や夢で埋めている。そして、その空白を本当に埋めてくれる“何か”を求めている。しかし、その“何か”を追求し現実のものにしようとするプロセスで、結果的に空白を充填していた夢や希望まで失ってしまう。Gatsby と Daisy のキスの挿話が最も象徴的だ。彼は、良家の娘を我が物にし、自らが経験したことのない世界を覗き見れると信じていた。貧しく、軍人のステータスを除いて社会的には何も保有していない彼にとって、Daisy を通して見える世界や未来は、まさに信仰にも似た力を彼に与えている——Daisyこそが、彼の中の空白を埋める夢であり希望なのだ。しかしこれは、現実のものとなると同時に Gatsby から推進力を奪い去る。信仰の対象が具現化し現実の存在として触れた瞬間、夢は醒め、消えて失われてしまう。彼がついに Daisy とキスした時、それが起こったのだった。

Out of the corner of his eye Gatsby was that the blocks of the side walk really formed a ladder

and mounted to a secret place above the trees — he could climb to it, if he climbed alone, and once there he could suck on the pap of life, gulp down the incomparable milk of wonder. His heart beat faster and faster as Daisy's white face came up to his own. He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God. So he waited, listening for a moment longer to the tuning fork that had been struck upon a star. Then he kissed her. At his lips' touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (86-87)

2. “Three Hours Between Planes”における喪失

多くの Fitzgerald 作品は、これまで述べてきたような物語上の構造を有している — 失われた“何か”によって生じた空白を信仰的な夢や希望で埋めようとするも、結果的に夢や希望も含めて全てを失ってしまう。本論では、その構造をより深く考察するため、“Three Hours Between Planes”に着目し、考察する²。なぜなら、この短い物語には、喪失を巡る物語が色濃く描かれているからだ。Fitzgerald の他作品と物語の構造面で多くの共通点を有している — 失った何かを確認し再奪取することを目的として、主人公は元いた場所に舞い戻ってくる。この類似点が指し示すのは、“Three Hours Between Planes”が他の Fitzgerald 作品と同様の位置を占め、それと同時に作家的主題を共有する作品である、ということだ。また、*The Great Gatsby* との相関性を考察する際に俎上に上がることが多いのは“Winter Dreams”や“Absolution”だが³、“Three Hours

² “Three Hours Between Planes”と“夢”や“希望”の関連性を考察する研究は存在する。例えば、Brian Way によれば、この物語は Donald Plant が人生における夢を失い、懐かしさから幻滅にシフトしていく物語だという — “It deals with that moment in a man's life when he loses his dreams, when he is forced to pass from nostalgia into disillusionment” (84)。Way が指摘する“Three Hours Between Planes”における“夢”の重要性には同意するものの、Fitzgerald の作品や人生に根底から影響を与えている“夢”や“希望”に関してより一層ミクロな考察が必要なのではないだろうか。すなわち、Fitzgerald 作品の登場人物たちが持つ（そして失う）“夢”をアメリカ人やアメリカ社会が普遍的に抱いているものと Way は規定しており、本論で指摘しているような、作家本人の本源的経験は見逃され、マクロな視点に基づく指摘に留まっているのである。

In Fitzgerald's view, Americans, characteristically, attach more importance to dreams than to grasped experiences: their inner lives may be rich and colorful, even when their outer circumstances are conventional, drab or sordid. Their youth is filled with dreams of an 'orgastic' future (the word he uses on the closing page of *Gatsby*). Later, they become victims of nostalgia, and their lost youth, which slipped by in mere anticipation, now seems to them the period when they truly lived. Finally, with middle age, come disillusionment; the inner life of dreams loses its power, and they find themselves alone in the emptiness of a purely material universe. (80)

また、脚注1でも先述しているように、“Three Hours Between Planes”が Fitzgerald の個人的経験から生み出されている点にも注意を払う必要があるだろう — 本作は、彼の初恋の女性との再会が起点となっている物語なのだ。本論では、作品中の“夢”に着目しつつも、それが物語全体に及ぼす影響や他作品との関係にも光を当てたい。

Between Planes”が併置されて考察されることは少ない。“Three Hours Between Planes”と他の Fitzgerald 作品との関係性や類似点を考察することで、先に述べた Fitzgerald の作家的主題を浮かび上がらせると同時に、この考察によって、Fitzgerald の作品群内の関係性にも新たな光を照射できるだろう。

物語は主人公 Donald Plant の不可思議な行動によって幕を開ける。飛行機の乗り継ぎのために中西部に降り立った彼は、過去に想いを寄せていた女性 — Nancy Holmes — の消息を辿ろうとする。二人が最後に会ったのは、ちょうど 20 年前。Donald は、Nancy が既に亡くなっている可能性を織り込んでいる。

He did not know whether she was alive, or living in this town, or what was her present name. With mounting excitement he looked through the phone book for her father who might be dead too, somewhere in these twenty years. (573)

Donald にとって、Nancy は彼の記憶や思い出の中だけに生きる人物であり、既にこの世に存在しないも同然だった。しかし、電話帳をめくってみれば、彼女はいまだにこの街に住んでいる。結婚もしている。本来であれば、Nancy がまだ生きていることを確認できさえすれば、彼にとっての当初の目的は果たされたはずであった — “He had found out what he wanted to know and had only three hours” (573)。Donald にとって、20 年間記憶の中に存在し続けていた Nancy は、今は亡き妻と同じくらい重要な存在でもあった — “Nancy, whenever I talked to my wife about the past, I told her you were the girl I loved almost as much as I loved her. But I think I really loved you just as much” (575)。そんな彼女が既に結婚し、まだこの街で生活しているという事実は、彼に衝撃を与えたのか。いや、彼が事実を知って動揺している様子はない。この不可解な描写は、その時まだ彼の中で Nancy が過去の中に釘付けにされたままであることを暗示する。先の考察で、過去のイメージは死者や喪失と同義と指摘したように、言い換えるならば、Donald の中で Nancy は現在に存在しながらも、既に失われた存在なのだ。極限的には死者そのものの代名詞として、Nancy は Donald の憧憬と戸惑いを誘う。そして Donald は更に深追いする。Nancy のことを、ついつい知りたくなってしまう。その様子は、不可抗力的な魅力として描かれている。

No. Walter Gifford — Hillside 1191. Blood flowed back into his fingertips.

“Hello?”

“Hello. Is Mrs Gifford there—this is an old friend of hers.”

“This is Mrs Gifford.”

He remembered, or thought he remembered, the funny magic in the voice. (573)

彼女の声聞き、引き込まれてしまう。過去の残像が生み出す“夢”によって、Donald は突き動かされている。喪失が喪失を招く構造の中に、踏み入ろうとしている。既に述べたように、彼の中でもはや彼女はこの世の存在ではなく、彼の中で信仰の対象のように神格化されている。Donald は実際に過去のままの Nancy の夢を見ている (574)。それはまさしく“夢”のように実体を伴わない存在であるとも言い換えることができる。しかし、その概念上の存在を彼はその目で確認し、実在させたいと思うに至る — “At the end of a curved drive he saw a dark-haired little beauty standing against the lighted door, a glass in her hand. Startled by her final materialization” (574)。主人公は、物語の序盤で既に、“失われた何か”を追い求め、強迫観念的にその存在を確認しようとしているのだ。このように、“Three Hours Between Planes”も本論冒頭で指摘している喪失の物語構造の範疇にある。

前節で見てきたように、Donald は Nancy の幻影を追い求めている。しかし、そこに彼が求める実像は存在しない。そもそも存在していないものを追い求める、存在しない場所を目指せば何が生じるだろうか。不一致やずれが生じるのではないか。この物語には、実際にすれ違いが冒頭から繰り返され描かれる。例えば、Donald と Nancy が抱える認識の不一致。再会直前のタクシーの中で、Donald は Nancy のイメージを現在のそれに“adjust”させる必要性に気付く — “And — because she was always ten years old in his dreams — the highball shocked him. But he adjusted himself with a smile — she was very close to thirty” (574)。彼の中の Nancy は、まだ10歳のあどけない少女で、ハイボールを夜な夜な一人で飲む女性ではなかった。再会の直前、彼はこの認識的ずれを慌てて修正する。二人の間に横たわる不一致が、物語のはじめに早くも呈示されている。タクシーを降り、再会を果たしてすぐ、Donald は二人の会話が噛み合いそうもないことを不安視している。そして、この再会は“college reunion”とは一味違ったものである、とも言及する — “It was a college reunion — but there the failure to find the past was disguised by the hurried boisterous occasion. Aghast, he realized that this might be a long and empty hour” (574)。Reunion, つまり、再会、合致とは異なったものになってしまうのではないかという不安を抱いている。ここで彼の記憶が蘇り始める — 20年前に彼らの関係が破綻したのは、Nancy が彼の真横を自転車で素通り — すれ違い — したことが決定的要因となったことを彼に思い出させる — “This derived in part from a vision of their last meeting — when she rode past him on a bicycle, cutting him dead” (574)。さらに、Nancy と Donald の記憶の食い違いも顕在化する。Donald は Nancy が“naughty girl” (575), “bad little girl” (577)であったことを序盤では記憶から完全に消し去り、Nancy を美化して記憶していることが次の彼女のセリフからも分かる — “Oh, this is such fun,” she said. “Such fun that you’re so nice, that you remember me so — beautiful” (576)。また、Nancy の Donald に関する記憶は正確さを顕著に欠いている。それもそのはずで、Donald は彼女の記憶から彼は完全に忘れ去られていた。詳細は後述するが、彼女の記憶にこびり付いていたのは別の少年だった。しかし、Donald Plant をその少年と勘違いしたまま、彼らの

再会は進行していく。本来なら噛み合うはずのない記憶と出会いは、実は埋めることのできない大きな不一致を冒頭から内包したまま進行していたのである。

その記憶上のずれを顕在化させたのは、1枚の写真だった。二人が味わっていた幸せな過去を巡る雰囲気は、ある写真の登場によって終わりを告げる。その写真は、二人の過去を巡る思い出の頂点であると同時に不一致の臨界点として突如として表出する。二人は、幼少時代の楽しい思い出を掘り起こすためにアルバムを囲む。写真を起点にして様々な思い出が蘇り、二人は共通する思い出話に花を咲かせる。しかし、そこに1枚の写真が現れる。Nancy にとっては楽しかった思い出を象徴する写真達一枚であり、彼女が恋した人の写真でもあった。Donald にとっても、その写真達は憧れた Nancy への思い出を復元してくれるものだった。しかしながら、彼に対して Nancy が強烈に逆照射したのは、Donald に対して彼女の記憶が内包する虚構だった。その写真に写っている少年は Donald Plant ではなく、彼と似ている Donald Bowers という別の少年のものであった。

For a moment Donald failed to recognize himself in the photo — then, bending closer — he failed utterly to recognize himself.

“That’s not me.” He said.

“Oh yes. It was at Frontenac — the summer we — we used to go to the cave.”

“What cave? I was only three days in Frontenac.” Again he strained his eyes at the slightly yellowed picture. “And that isn’t me. That’s Donald Bowers. We did look rather alike.” (576)

彼らの思い出を支え、過去の記憶の担保として登場する写真は、Nancy の誤認が判明すると同時に、Donald Plant の思い出全体に引導を渡すことになる。二人の記憶の間で直前までやりとりされていた約束手形に、突如不渡りが宣告されてしまうのだった。

虚構とはつゆ知らず、虚構の物語を追い求めれば、辿り着くのは破綻しかない。存在しない対岸に橋を架けることは出来ない。虚像の Nancy を追い求め、ようやくキスに到達したものの、その結果自らが探していたものの空白感に気付き慌てる Donald — “He was excited — but most of all confused. Had he kissed Nancy? or a memory? or this lovely trembly stranger who looked away from him quickly and turned a page of the book?” (576)。2人の関係は、噛み合いようもなく根底からすれ違っていった。Donald が Nancy の虚構を追い求めていたのであれば、Nancy も Donald の虚構を追い求めていた。Nancy が語る思い出話は、Donald Plant にとっては完全なる虚構でしかなかったのである。2人がそれに気づくまでは、Donald は、Nancy の記憶の中から消滅していたのだった。過去に置き去りにされ忘れ去られた存在 — 死者と言い換えることもできるだろう — が突如 Nancy の目の前に前景化される。そのことで生じるのは、当然ながらパニックである。だからこそ、単なる人違いにも関わらず、Nancy の驚き具合は常軌を逸している。

She was on her feet — her face faintly horrified.

“Plant! Bowers! I must be crazy! Or it was that drink? I was mixed up a little when I first saw you. Look here! What have I told you?” (577)

そしてあたかも死者を目の前にして狼狽える人を宥めるかのごとく、Donald は、聖職者として振る舞っているのである — “He tried for a monkish calm as he turned a page of the book” (577)。夢や遠くの過去（としての死者）を現実化することはできず、その分岐点を越えようと挑戦すれば、そこには破綻が待ち構えている — それは、決定的な喪失である。失ったものを追いかけて、過去の掘り起こしをすれば、それは結果的に本当の喪失を招くだけなのだ。

この喪失や崩壊は、Donald が“夢”としての Nancy を“物質化”させようとしたことが引き金となった。夢として描かれる Nancy は、それと同時に死せる存在としても物語に導入されていた。夢や死者は、現実の世界に持ち出し、触れては行けない。これは先述した Gatsby と Daisy のキスのエピソードが指し示す通りであり、“Three Hours Between Planes”でも Nancy とのキスが Donald の“夢”を物質化させ崩壊へと導くカタリストとして描かれている — そのキスの直後に、Donald の夢を崩落させる決定的要因となったアルバムと写真もまた、過去の記憶の物質化に他ならない。興味深いことに、文字通り記憶の奥深から掘り起こされた写真は、二人が“cave”を訪れた際のものであった (576)。封印すべきだった過去が掘り起こされ、解凍されたことで、長い間忘れ去られていたことが地中深くから表出する。その写真やアルバムを、Nancy は文字通り掘り起こしていたではないか — “I’ve got a photograph book upstairs I haven’t looked at for years. I’ll dig it out” (576)。

Donald にとって現実の Nancy がまるで死者のように過去に塗り込められた存在として物語冒頭に現れているのと同様、Nancy にとっても現実の Donald は完全に忘れ去られた存在なのだ。この世に既に存在せず、人々の記憶からも消滅した存在とは、死者の別名に他ならない。しかし、それを無理矢理に掘り起こせば、そこには現在と過去の記憶上の境界線が無秩序的に震撼させる未知なるもの、絶対的に異邦なる存在が現れる。それは当然、先述したように、想定を超える絶対的な恐怖を Nancy に引き起こす。これは単なる人違いではなく、死者を目の前にした人の反応である。記憶から完全に葬り去られた存在への恐怖。ここで、二人がお互いに抱いていた虚構への期待とその破綻が急速に現前化することになる。思い起こせば、過去の Donald に致命傷を与えたのは、二人がすれ違ったことだった (574)。この場面においても、同じ構造が再現されることになる。今回は記憶のすれ違いという形によって。またしても Donald は Nancy の深い忘却に葬り去られるのだった。

Donald も作者と相似的な問題を抱えていた — 常に付き纏う喪失感、その欠損を埋め合わせようとするのが、更なる、そして決定的な喪失を呼び込んでしまう。先述の通り、過去の喪失を確認すべく彼は中西部の街に降り立った。しかし、結果的に彼が遭遇するのは、更なる喪失で

ある。Nancy との関係が決定的に断たれた上に、Nancy との再会によって彼は人生の“good deal”をも失ってしまう — “Donald had lost good deal, too, in those hours between the planes — but since the second half of life is a long process of getting rid of things, that part of the experience probably didn't matter” (578)。これは単に彼女との思い出を失う以上の強い衝撃を Donald に与えている。ここでも、喪失や空白の根源を特定しようとすれば、かえって喪失を招いてしまう。回帰し続ける抑圧、すなわち、不在や空白が喚起する存在への願望にこの物語も貫かれているのだ。

3. 他の作品における喪失

失ったものを埋め合わせようとすればするほど、更なる喪失を招いてしまう — この構造は、Fitzgerald の他の作品でも描かれている。“Babylon Revisited”では、亡くなった妻の信頼を取り戻すという到達不可能な要求を義理の姉 Marion から課され、それを達成しようと奮闘するも、過去の亡霊たち — “ghosts out of past” (164) — の介入によって最後の希望である娘を Charlie Wales は決定的に失う。娘を今度こそ取り戻すために、Charlie はパリに戻ってくるだろう。かつて経済的な崩壊を受けて全てを失ったものの、今や彼の生活は完全に立て直されており、彼の再訪を妨げるものは何もない。しかし、娘の親権を握る Marion の Charlie に対する不信は、もはや回復の望みがないほど根深い。それは、妹の死は Charlie によるものだという誤解に基づいている。Charlie の妻の直接的な死因は心臓麻痺だが、Marion はその死を Charlie の不摂生な行動に結びつけ、責任を追求し続けるのだった。これは支払い不可能な負債のようなものだ。債権者亡き後、それを支払うことは許されない。支払いの不可能性は、永遠に娘の親権を取り戻せないことを意味している。物語の最後では、掴み損ねた娘の親権を再び取り戻そうとする彼の試みに対する、再度の喪失が予告されている。

He would come back some day; they couldn't make him pay forever. But he wanted his child, and nothing was much good now, beside that fact. He wasn't young any more, with a lot of nice thoughts and dreams to have by himself. He was absolutely sure Helen wouldn't have wanted him to be so alone. (633)

このように Charlie は、過去の精算を終えるまでは望みを叶えられない。しかし、前述の通り、彼が過去の借金を支払うこと自体が既に不可能なのだ。となれば、繰り返される喪失が彼を待ち構えているのである。

The Great Gatsby の縮小版として描かれたとされる“Winter Dreams”では、Dexter の喪失もまた、物語の中では彼の認知の外にある。物語の最終盤でかつて恋焦がれた女性 — Judy Jones — が結婚し、夫から酷い扱いを受けていると知った時、彼は失ったかもしれない何かに気付く

のである。

For he had gone away and he could never go back any more. The gates were closed, the sun was gone down, and there was no beauty but the gray beauty of steel that withstands all time. Even the grief he could have borne was left behind in the country of illusion, of youth, of the richness of life, where his winter dreams had flourished.

"Long ago," he said, "long ago, there was something in me, but now that thing is gone. Now that thing is gone. I cannot cry. I cannot care. That thing will come back no more." (235-36)

The Great Gatsby でもまた、Jay Gatsby は何かを探し求めているのだが、それは Daisy そのものではなく、失ったものの探求であると言える。彼にとって、Daisy を我が物にすることは最終着点ではなく、目標の達成による空白の埋め合わせを第一に目指している。これは構造的に "Three Hours Between Planes" と似通っている。*The Great Gatsby* においても Daisy を Tom から奪い取るのではなく、彼女を通して彼が過去に失った何かを明確にしようとしている。Gatsby は Daisy に Tom との過去を敢えて否定させ、過去の再興を目指す。しかし、彼女に過去を修正する意図はなく、Gatsby は Daisy を決定的な形で失う。"Three Hours Between Planes" においては Donald と Nancy のキスを彼女の夫には伝えないように何度も念を押している (576)。もし単に Nancy との関係性を回復させ、彼女の夫の地位を単純に奪い取りたいのであれば、Nancy とのエピソードをわざわざ覆い隠す必要もあるまい。彼女の夫は、遠く離れた New York で別の女性と秘密裏に会っているのだから (574)。あくまでも過去の Nancy との関係性を回復しようとする彼の試みからは、女性を通して何かを見つけ出そうとする意図が明確に見える。それは過去に失ったものを特定するための挑戦でもあった。

"The Rich Boy" では、主人公の Anson Hunter は何一つ不自由のない出自でありながら、何かを求めて女性達の間を行き来する。世俗的な願望や欲望が彼を駆動しているのではなく、彼は女性たちとの関係を通して何かを見出そうとしており、それは結果的に常に決定的に何かの欠乏した状態で進行する。そしていつも最終的には女性を失う。同じように、歳を重ねるのと比例して、彼は多くのものを失っていく——昔馴染みの友人、親戚との信頼関係、職場における地位、そして結婚寸前の関係になった Paula Legendre との突然の再会と彼女の死。物語の最後は、30 歳になった彼がその後も引き続き誰かを必要とし、そしてこれ以降も失い続けることが語り手である Anson の友人によって暗示している。

I don't think he was ever happy unless some one was in love with him, responding to him like filings to magnet, helping him to explain himself, promising him something. What it was I do not know. Perhaps they promised that there would always be women in the world who would

spend their brightest, rarest hours to nurse and protect that superiority he cherished in his heart. (349)

Anson の姿は、“Three Hours Between Planes”における Donald とも相似的だ。いずれにしても、彼らは自らが何を失ったのかを把握できていない。そしてそれは、そもそも保有していなかったもの、もしくは、様々な要因で彼らの認知の外に置かれており、失ったことを認識できていない状態にあるのだ。それゆえに、喪失したものの確認するために彼らは元の場所に戻り、空白の穴埋めを試みる。しかしながら、それは永久に続く喪失への扉を開くことになる。

これまで考察した作品とは逆に、失った“何か”の回収を試みず、喪失によって生じた空白をそのままの状態で維持しようとする物語もある。“The Long Way Out”では、この世から存在を消した人物を死者として認識するのを拒むことで、決定的な破滅の到来が回避されている。この作品では、ある女性が亡くなった夫を待ち続けている。女性は精神的な疾患で病院に長期間入院している。彼女の入院生活を支えている唯一の希望は、病が治癒した暁に夫と小旅行に出かけることだった。そんなある日、彼女の状態は幾分回復し院長は数日間の外出を許可する。待ちに待った旅行を目前にして、彼女は念入りに準備をして夫の迎えを待つ。しかし、出発当日、迎えに来る途中で遭遇した交通事故によって夫は亡くなる。医師から事実を伝えられた女性は、その事実を受け入れることを拒否し、毎日玄関に赴き夫が迎えに来るのを待ち続けるのだった。彼女が待つ場所に、夫が現れることは無い。しかし、彼の存在を死者として認定しない、死によって生じた空白を保持するとともに回復を目指さないことで、彼女は明日も存在し夫を待ち続けることができる。欠損を欠損として認定しないことが、彼女に希望を与えている、とも換言できる。この物語は、これまで考察した作品とは真逆のアプローチを喪失に対して用いている——失われた何かを未確定な状態でペンディングしている。この手法は、これまでの法則性の範疇を逆説的に明らかにしている。死者や過去の喪失を暴き回復を目指さないのであれば、決定的な喪失や崩壊を未然に防ぐことができる。このように、他の物語とは真逆の方法で Fitzgerald 作品と喪失の主題を“The Long Way Out”は浮かび上がらせていると言える。

おわりに

F. Scott Fitzgerald の作品には、喪失の主題が通奏低音のように流れ、そして繰り返し描かれている。この主題は作者自身の経験に根ざしており、彼自身に固有の問題が作品にも色濃く反映されている。それは彼が生まれる以前から背負うことを運命付けられた十字架だった。生前から失っていたもの、つまり、この喪失は作者や作中の登場人物達が実際に失ったものではない。彼らは何を失ったのかを認識しておらず、その何かを特定し回収しようと試みるも、その行為が実体を伴う本格的な喪失を逆に招いてしまっている。喪失を回復させようとするのが、更なる喪失を招いてしまう。このような物語的構造として Fitzgerald 文学に反復して描かれている喪失

こそが、一本の糸として彼の文学作品を貫く主題なのである。

引用文献

- Breitwieser, Mitchell. *National Melancholy: Mourning and Opportunity in Classic American Literature*. Stanford UP, 2007.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew J. Bruccoli, Cambridge UP, 2013.
- . “Babylon Revisited.” 1931. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald: Taps at Reveille*. Edited by James L. West III, Cambridge UP, 2014, pp. 157–77.
- . “The Long Way Out.” *Babylon Revisited and Other Stories*, Scribner, 2003, pp. 249–54.
- . “Winter Dreams.” 1922. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew J. Bruccoli, Scribner, 2003, pp. 217–36.
- . “The Rich Boy.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew J. Bruccoli, Scribner, 2003, pp. 317–49.
- . “Three Hours between Planes.” *The Collected Short Stories*. Penguin, 2000, pp. 573–78.
- Forster, Greg. “Gender, Melancholy, and the Whiteness of Impersonal Form in *The Great Gatsby*,” *Gender, Race, and Mourning in American Modernism*. Cambridge UP, 2011, pp. 15–53.
- Lehan, Richard D. *F. Scott Fitzgerald and the Craft of Fiction*. Southern Illinois P, 1966.
- Schiff, Jonathan. *Ashes to Ashes: Mourning and Social Difference in F. Scott Fitzgerald’s Fiction*. Susquehanna UP, 2001.
- Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction*. St. Martin’s P, 1980.